知的障害者の居住空間と住み方に関する研究
～中間的な居住場所としてのブランチホームに注目して～

井 尻 智 子*・西 尾 幸一郎*・水 野 弘 之*

Study on space for living and way of living for the intellectual disabilities
— focusing on Branch Homes as an intermediate home —

Ijiri Tomoko*, Nishio Koichiro and Mizuno Hiroyuki*

Abstract: The purpose of the study is to have a close look at Branch Homes among several types of intermediate homes, and is to learn what kind of measures are taken to support the retarded to live and what influence do they have through them.
Results:1) new ideas for space, way of living and others as well as those effects. ①Effects for the retarded at Branch Homes. ②Effects for the retarded outside Branch Homes. ③Effects for members and carers involved.2) Efforts made on Branch Homes and their situations.

(Accepted September 10, 2004)

1 序　論

1—1 研究の背景

近年，知的障害者のニーズに合わせた住む場所づくりに向かって，知的障害者・家族・関係者などによって，下記のような住む場所づくりの取り組みが，日本各地で積極的に行われている。

①自宅……ホームヘルプサービス・レスパイトサービス・住環境改善などの居住支援（サポート）
②入居施設……個室化・ユニットケア・生活訓練棟設置など
③上記①②の中間的な住む場所……生活体験ホーム（生活体験型のグループホーム）・グループホーム・生活寮・その他（アパートなどで知的障害者がケアを受けながら単身で生活，など）

上記③の多くは，地域にある一般住宅であり，在宅や施設入居中の知的障害者が，自宅や施設を出て，ケアサポートを受けながら，周辺の地域住民とふれ合いながら生活できるような場所づくりが注目されている。そのような場所で生活する知的障害者は，年々増加しており，知的障害者の生活の質を高め，地域住民が知的障害者に対する理解を深める上で，大きな役割を果たしている，という報告が，数多く出されている。

しかし，施設関係者の話によれば上記③のような場所への移住に際して，次のａ）～ｃ）のような問題・不安が生じるケースも少なくないようである。

ａ）居住環境の急激な変化（施設からグループホームなど）により，体調不良や情緒不安定になる場合もあり，環境に慣れるまでの準備期間が必要なケース
ｂ）知的障害者が自宅や施設を出て，暮らすのは困難と思い，家族が反対するケース
ｃ）知的障害者自身が，新しい場所での生活がどのようなものか分からないなどの不安を感じているケース

上記ａ）～ｃ）のような問題・不安を解消するためのひとつの方法として，知的障害者の籍を自宅や施設に残したままで，一定期間，地域にある一般住宅で体験的に居住する生活体験ホーム（生活体験型のグループホーム）に関する取り組みが，施設関係者らによって行われ始めている。例えば，Ｋ施設では，「ブランチホーム」という名称で生活体験ホームの取り組みを積極的に行っており，毎年，多くの施設入居者が地域での生活体験を積んでいる。その中には，施設を出て地域で暮らすことができるようになった施設入居者も少なくない。

*京都府立大学人間環境学部福祉空間計画研究室
Laboratory of Welfare Space Planning, Human Environment and Agriculture, Kyoto Prefectural University

1－2　研究目的

本研究の全体目的は，1－1③のひとつとしてのブランチホームに注目し，そこでは居住支援のために，どのような取組みが行われており（空間的工夫を含む），どのような効果が生じているのか等について，住環境学の視点を含めて検討することである。

そのために，次のような個別的課題について検討する。

1）ブランチホームに関する様々な取り組みの実態など
2）ブランチホームにおける空間的工夫，住み方に関する工夫，左記以外の生活に関する工夫とその効果
　①ブランチホーム居住者（知的障害者）にとっての効果
　②ブランチホーム居住者以外の人にとっての効果

1－3　従来の研究

知的障害者の住む場所を地域の中につくるための，住居学・建築学分野の専門家によるこれまでの研究は，次のとおりである。

上記1－1②の「入所施設」に関する既存研究[1)2)]は，非常に多く，豊富な蓄積がある。上記1－1①の「在宅」に関する研究[3)]は，まだ始まったばかりであるが，少しずつ行われ始めている。

上記1－1③の「中間的な住む場所」は，居住形式別に大きく整理すると，「自宅や施設を出て，継続的に住み続ける場合（グループホーム・生活寮など）」と，「自宅や施設に籍を残しつつ，一定期間，体験的に居住する場合（生活体験ホームなど）」がある。前者に関する研究は，近年，盛んになっており，例えば，鈴木らや，足立らによって一連の研究がある[4)5)]。後者に関する研究としては，河東田の研究[6)]（ブランチホームに関して少し触れている），林らの研究[7)]（生活訓練ホームについて）などがあるが，まだ始まったばかりのようである。

1－4　調査の方法

1）事例調査…K施設のW寮（表1参照）のブランチホーム（表2参照）の中から，2カ所（表3，表4参照）を選んで，次のような調査を行った
　・調査対象…施設職員・ブランチホームの世話人（以下，世話人と略記）・ブランチホーム居住者
　・調査内容…上記1－2の個別課題参照
　・調査時期…2003年11～12月
2）上記の補足調査（電話またはFAXによるヒアリング，2004年1～3月）

2　ブランチホーム〈K〉に関するケーススタディ

2－1　概要

ブランチホーム〈K〉では，マンション1階の一戸（3LDK）で3人の知的障害者が暮らしており，世話人と施設職員がその生活を支援している。詳しくは，表3，図1に示す通りである。

表1：K施設W寮の概要

・K施設の中の8つの寮の中の一つ。
・定員50名。比較的経度の知的障害者が入所。
　注）W寮の部屋―4人部屋（※1973年に開設された施設であり，最低基準に基づいて設立されたため）
・W寮では，5ヶ所のブランチホームを保有しており，常時20名が自活訓練を実施している。
・施設職員は数人の入居者を担当（固定）。その入居者がブランチホームで生活をする間，ブランチホームを訪れ，その入居者の生活支援を実施。

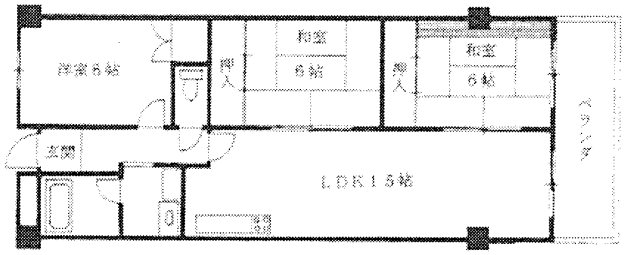

図1　ブランチホーム〈K〉平面図

表2：ブランチホームの概要

■ブランチホームの特徴
・K施設の入居者が短期間（2週間から半年）利用。地域生活の体験や自活訓練を実施。
・建物―施設敷地外の戸建て住宅，マンションなど。賃貸。
・K施設全体のブランチホームは11ヶ所。そのうち，W寮のブランチホームは5ヶ所。
・入居者はブランチホームでの生活の後，施設に戻ることもできる。グループホームに移住する人もいる。

■ブランチホームの支援
世話人・施設職員が中心となり，ブランチホームの支援が行われている
◇世話人（ブランチホームごとに1人，固定）
・平日（月～土）の朝2時間と夜4時間，ブランチホームに勤務（勤務時間帯は居住者に合わせている）
・居住者の食事づくりや健康管理などの生活支援を行う
・世話人は，地域住民である（施設職員ではない）
◇施設職員
・毎日ブランチホームを巡回
・ブランチホーム居住者からの相談を受ける
・世話人に対する支援のアドバイスや指導を行う

表3：ブランチホーム〈K〉の概要

■住戸形態―マンション1階の1戸を使用（図1参照）
■居住形態―3人の知的障害者（男性）が共同で生活している（居住者はほぼ入れ替わりをしない）
■支援―世話人（女性）と施設職員で行う
◇世話人が行う支援
・平日(月～土)の朝（7時～9時）と夜（5時～9時）にブランチホームに勤務する
・居住者の食事づくりや健康管理などの生活支援を行う
・知的障害者の通院（歯医者）の付き添いを行う
・マンションの居住者に対する引越しの挨拶
・ブランチホームの共用空間の掃除（トイレなど）
・ブランチホームの家具や生活用品の購入
◇施設職員が行う支援
・居住者の薬を届ける（必要に応じて）
・居住者から日中の活動の様子やブランチホームでの出来事を聞く
・知的障害者や世話人の相談にのる（例えば，世話人が知的障害者の様子などを見て心配している時に相談にのる）

2―2　居住者にとっての効果

◆生活空間の範囲の拡大

ブランチホームのために賃貸住宅を施設職員が探す際には，居住者（知的障害者）が歩いて利用できる店が近くにあるかどうかをチェックするそうである。これは，居住者の生活空間の範囲を広げるためである。ブランチホーム〈K〉の周辺には様々な店があり，居住者が徒歩で利用している。

居住者〈K―2〉は，お気に入りの店をいくつか見つけてコーヒーを買うなど，ほぼ毎日利用しているそうである。また，〈K―2〉は休日には少し遠い店に行って昼食を買うなど，生活空間の範囲が拡大しており，時間と用途によって店を使い分けているそうである。なお，彼は，以前は地域の店に買い物に行くことはあまりなかったそうである*1。

◆居住者同士のトラブルの減少

ブランチホーム〈K〉では，居住者同士，居住者と世話人，居住者と施設職員の間のコミュニケーションの促進のための取り組みも行われている。例えば，居住者同士のコミュニケーションの促進のために，次のような取り組みが，施設職員によって行われている。

①施設で生活していた時の状況を踏まえて，できるだけ気の合う人同士が同じブランチホームに入居できるようにする。
②ブランチホームに入居後に，居住者同士の仲や相性がよくないことがわかった場合は，入居者の組み合わせを替える。

上記①②の結果，居住者同士は仲が良く，ケンカやトラブルになることがほとんどなくなったとのことである*2。なお，筆者らの質問（ここに住むようになって良かったこと何ですか？）に対して，居住者3名から口々に「ここではケンカがない」という回答があった。これは精神的効果であると考えられる。

また，居住者同士でトラブルがおきた場合は，世話人が仲立ちをしているとのことである。世話人は交代ではなく，いつも同じ人が平日の朝（7時～9時）と夜（5時～9時）の時間帯に居住者と共に時間を過ごしており，居住者同士の相性が，よくわかるとのことである。

◆生活空間の使い方・家事能力の向上

ブランチホームでは，居住者が生活空間の使い方や家事がうまくできるように，世話人はサポートしている。居住者〈K―1〉～〈K―3〉の3人がブランチホームに入居した当初は，食器洗いがうまくできなかったそうである。例えば，〈K―1〉は，洗った食器と汚れている食器を区別せず，同じたらいに入れてしまうことなどがあったそうである。

世話人は，次の①～③のようなサポートをしたそうである。

①食器洗いをするときの空間の使い方と食器洗いの手順を教えた（下記参照）。
■汚れた食器を流し台のたらいの中に置く
■次に調理台にふきんを広げて置き，その上に洗った食器を置く
■そして，拭いた食器を食器棚に収納する
②居住者が食器洗いをするときに，台所で居住者の横に立ってアドバイスをした。
③「食器洗いをしましょうね」と声かけをした。

上記①～③の結果，居住者は自分で使った食器を洗うことができるようになったそうである。

以上のような世話人によるサポートの効果が生まれている要因としては，世話人の家事遂行能力，滞在時間（平日の朝と夕方の数時間＝前述），一緒に家事をする，などが考えられる。

2―3　居住者以外の人にとっての効果

◆世話人にとっての効果

ブランチホームでは，居住者と世話人のコミュニケーションの促進のために，施設職員によって①のような取り組みが行われている。

①ブランチホームで，居住者と世話人の相性がよくないことがわかった場合は，世話人を他のブランチホームの世話人と入れ替える

上記①の結果，ブランチホーム〈K〉では世話人が居住者と仲が良い*3。世話人は，居住者が毎日の出来事を

話すのを聞いたり，夕食の時間に一緒に団欒するようになって，「ブランチホームの3人と過ごしていて癒されるなあ」と感じているそうである（精神的効果）。

また，世話人が，居住者のことなどで悩んでいる場合は，施設職員が世話人の相談にのるようにしているそうである。施設職員は居住者とのつきあいが長く，居住者のブランチホーム以外での生活（職場での生活など）もよく知っているので，世話人にアドバイスをすることができる。

◆施設入居者（知的障害者）にとっての効果

ブランチホームでは，施設入居者が施設を出て地域での生活を知ることができるための取り組みが行われていることがわかった。

ブランチホームでは，施設入居者が，ブランチホーム居住者がブランチホームで生活する様子を見にきたり，実際にブランチホームの生活を短期間体験する機会を設けている（ブランチホームで長期間生活をして，自活訓練を行う施設入居者もいる）。その結果，ブランチホームの生活を体験した施設入居者の中には，ブランチホームでの生活を楽しいと感じて，もっと長期間ブランチホームで住んでみたいと思うようになった施設入居者が何人かいた*4。彼らはブランチホームでの生活を体験した後に施設に戻ってから，施設での生活が以前より前向きで明るくなったり，積極的に他人に話しかけるようになったそうである。

3　ブランチホーム〈O〉に関するケーススタディ

3—1　概要

ブランチホーム〈O〉の概要は，表4および図2に示す通りである。

3—2　ブランチホーム居住者に対する効果

◆居住者〈O-2〉にとっての効果

ブランチホームでは，居住者の生活空間が広がっていることがわかった。

ブランチホーム〈O〉の居住者〈O－2〉は，これまで長期間，施設で生活してきた。〈O—2〉がブランチホームで生活し始めた頃は，慣れないことも多く，精神的・体力的な疲労が激しくて体調を壊して施設に戻ることもあったそうである。しかし，施設職員と世話人の気配りや工夫もあり，〈O—2〉は徐々にブランチホームでの生活に慣れ，現在では短期間（2週間）だが，施設を出て地域の社会資源（住む場所，サポートする地域住民，地域の店など）を利用しながら生活することができるようになった。

◆居住者〈O-1〉に対する効果

ブランチホームでは，居住者が自分にあった生活スタイル（趣味や生活習慣など）を，自分で組み立てていく能力を発揮できることがわかった。

表4：ブランチホーム〈O〉の概要

■住戸形態—戸建て住宅（3階建）の2・3階を使用（図2参照）
■居住形態—4人の居住者（男性）が共同で生活している（居住者は短期間で入れ替わることが多い）
■支援—世話人（女性）と施設職員で行う
◇世話人が行う支援
・平日（月～土）の朝（6時半～8時半）と夜（5時～9時）に勤務
・居住者の食事づくりや健康管理などの生活支援を行う
・居住者の相談にのる
◇施設職員が行う支援
・居住者の薬を届ける（必要に応じて）
・居住者から日中の活動の様子やブランチホームでの出来事を聞く
・居住者や世話人の相談にのる

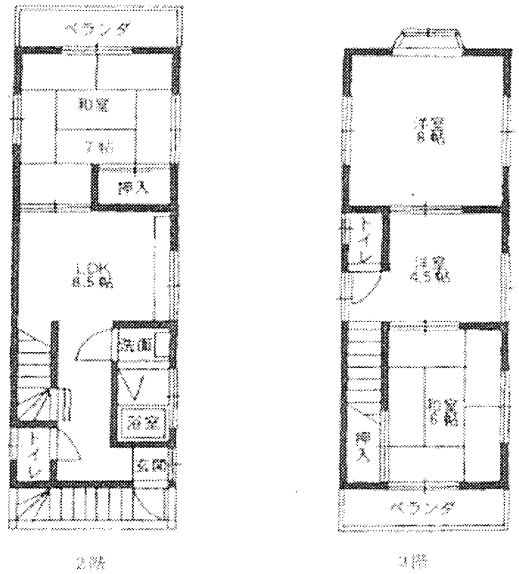

図2　ブランチホーム〈O〉平面図

汚れた服をためずに毎日洗濯したいと思っていたそうである。しかし，施設に住んでいるとき，残業で施設への帰りが遅くなると（20時半頃），施設の消灯時間が22時であることから，洗濯をすることができなかった。また趣味のテレビゲームもできないことがあった。

〈O—1〉はブランチホームに住むようになって，毎日，洗濯やテレビゲームができるようになった。ブランチホームでは消灯時間が決まっていないので，〈O—1〉は残業の日には，寝る時間を少し遅くして，寝る前に洗濯やテレビゲームを行うように工夫した。

少人数で生活するブランチホームでは，自分で生活パ

ターンを考えたり，その日の予定に応じて生活パターンを変えたりできるので，居住者が自分にあった生活スタイル（趣味や生活習慣など）を，自分で組み立てていく能力を発揮できるようになった[*5]。

3−3　居住者以外の人に対する効果

◆元ブランチホーム居住者に対する効果

ブランチホームの居住者が地域生活を営む中で困っていることに対して，周辺に住む地域住民が様々なサポートをしていることがわかった。

世話人が以前，一緒に生活していた元ブランチホーム居住者（現在はグループホームで生活している）は，そのブランチホームで住まなくなってからも世話人のもとに電話をかけてくるそうである。電話の内容は，職場での悩み事などである。世話人は，元居住者に対して電話でアドバイスをしたり，励ましたりしている。また，世話人は,元居住者の職場関係者と知り合いであったため，職場関係者と相談をするなど，元居住者の悩み事が解決するように働きかけた。ブランチホームでは，世話人という地域で居住者を支えてくれる人が現れたことによって，居住者が地域でサポートしてもらえるようになった。

◆施設職員にとっての効果

職員は,ブランチホーム居住者に対する支援を通じて，どのような支援が必要かを検証できることがわかった。

例えば，施設での生活が長かった居住者〈O—2〉は，ブランチホームでの生活を楽しいと感じている。ただし，ブランチホームでの生活にはまだ慣れておらず，気苦労も多いようであり，時には，体調を崩したりして仕事に行けないこともある。施設職員は，頻繁にブランチホームを訪問して彼を見守り，電話で近況を尋ねたりしている。施設職員は，〈O—2〉が体調を崩しそうになった場合は，施設に戻ってもらい，回復を待って再度，ブランチホームで暮らしてもらうという試みを何度か行っている（2週間程度であれば何とか生活できるようである）。そんな生活体験を何度も繰り返しているそうである。この経験を通じて，ブランチホームでの生活に少しずつ慣れていく過程が必要な知的障害者もいることに，施設職員は気づいたそうである。つまり，その人に合わせた支援の必要性に気づいたそうである。

4　ま　と　め

本研究の対象であるブランチホームに係わる取組を検討した結果，次のようなことがわかった。

(1)ブランチホーム〈K〉の場所の選び方，ブランチホーム居住者の組み合わせなどの住み方に関する工夫が行われている。

(2)上記(1)の生活空間に係わる工夫以外にも，食器洗いの支援などの様々な生活支援のためのサポートが行われている。

(3)上記(1)の工夫，上記(2)のサポートは，知的障害者ひとりひとりの個性に合わせて，また，個々のブランチホーム毎の生活環境・住環境などの特性に合わせて実施されている（その効果の内容は後述）。

(4)上記(1)の工夫，上記(2)のサポートは，主として，生活世話人・施設職員によって行われている。

(5)上記(1)〜(4)のような工夫やサポートよって，次のような効果が生じている。

①住み方に関する工夫による効果—ブランチホームの場所を，居住者が徒歩で買い物ができるような場所にしたので，居住者が時間と用途によって店を使い分けているなど（2−2参照）。

②居住者（知的障害者）にとっての効果—個性と自主性を発揮する機会が増えており，それを通じて自立・自律・発達が促進されている（3−2参照）。また，ブランチホームでの生活を楽しんでいるなどの精神的効果、（2−2参照），生活空間が拡大する効果も生じている（2−2参照）。

③居住者以外の知的障害者にとっての効果—ブランチホームを出てからも，世話人に悩み事を相談するなど人間関係が拡がっているなど（3−3参照）。

④世話人にとっての効果—ブランチホームで居住者と生活することを楽しんでいるなどの精神的効果，人間関係が拡がっているなどの効果（2−3参照）

⑤施設職員にとっての効果—居住者の様子を見ながら，ブランチホームと施設の両方の住み替えをおこなうなどの支援が必要であることがわかったなどの効果（3−3参照）。

【謝辞】

最後に今回の調査にご協力いただいたブランチホームの世話人の方々，居住者（知的障害者）の方々，施設職員の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。また，K施設の白土氏にはご指導・ご助言いただきました。記して謝意を表します。

【参考文献】

1）安間育美・阿部祥子・小川信子「『精神薄弱』者施設計画に関する研究—平面タイプの検討—」日本建築学会大会学術講演梗概集，P949〜950，1979.9

2）宮崎隆弘・三浦昌生・新井綾・梅田裕子・渡辺由美：「ヒアリングによる障害者・障害児施設の居住環境の評価項目の抽出　施設環境実態に基づく障害者・障害児施設の環境設計のあり方　その1」日本建築学会大会学術講演梗概集，P1101〜1102，1999.9

3）西尾幸一郎・大庭史・水野弘之「在宅知的障害者の在宅生活における困難緩和のための住環境と住み方の改善に関する研究」日本福祉のまちづくり学会 第6回全国大会梗概集，p191-194，2003年7月

4）倉坪龍彦・鈴木義弘・中武啓至・小野篤徳・八坂章二郎：「グループホーム入居者の特徴について―知的障害者グループホームの居住水準向上のための基礎的研究　第一編―」，日本建築学会大会学術講演梗概集，P.303～304，2001.9
5）井川清・亀谷義浩・荒木兵一郎・足立啓：「知的障害者グループホームの居住環境」日本建築学会大会学術講演梗概集，P.325～326，1999.9
6）河東田博：「スウェーデン・イギリス・日本における知的なハンディをもつ人々の入所施設から地域の住まいへの移行の実態と課題」立教大学コミュニティ福祉学部紀要第5号，2003
7）林章：「知的障害者のグループホーム等の研究　その1：全国的概況」日本建築学会学術講演梗概集2000.9

【脚注】

＊1　K施設は郊外の山の中にあり，近くに店がない。

＊2　施設では，多人数での生活であり，気の合わない人同士が同じ空間で生活している場合もあり，入居者同士のトラブルもあるそうである。

＊3　世話人は別のブランチホームにいたとき，居住者とのコミュニケーションをとるのが困難な場合があったそうである。世話人はその時，「世話人の仕事は難しい」と感じたそうである。

＊4　ブランチホームに住んだことがない施設入居者の中には，施設職員などから口頭で説明を受けても，ブランチホームでの生活とはどのようなものかよくわからず，ブランチホームで生活することに興味を示さなかったり，施設以外の場所で生活したいと思わない人もいるそうである。

＊5　施設では多くの入居者が生活をするので，消灯時間などのような集団生活のルールに制約がある。それゆえに，利用者が自分の個性にあった生活スタイル（趣味や生活習慣など）を，自分で組み立てていくことが困難な場合があるようである。